

—人がつながり、まちを元気に—

「地域福祉実践 in なら」

昨今、単身化・高齢化などを背景に、孤立や無縁といった社会問題が浮き彫りになり、昨年の震災や台風災害の経験を通じても、私たちは改めて地域の絆・つながりづくりの大切さを確認しました。これから地域社会や暮らしを考えていく上で、まさに地域福祉は「切れ札」ともいえる重要なテーマであるといえます。

このような状況を踏まえ、県社協では現在「暮らしのセーフティネットとしてのつながりと仕組みづくり」を進めるため、身近な地域での住民同士の支え合い活動や様々な専門職・関係者の協働による重層的なセーフティネットを目指しています。

既に、地域福祉の実践は、県内の様々な担い手により拡がっています。

そこで、本紙では、奈良県下で地域住民、ボランティア、NPO、社会福祉法人など、様々な担い手によって展開される「地域福祉実践」を紹介し、その創意工夫に学んでいきます。

広がる 小地域福祉活動

『地域をつなぐ力ギは子ども』

～ 関屋近鉄住宅
地域福祉推進委員会での
子育て支援の取り組み～

日差しの強い夏の日、自治会の集会所から子どもたちの元気な声が聞こえる。この日は0~4歳児を対象としたプール開放があり、幼児たちは気持ちよさそうにプールで遊んでいた。特に、ペットボトルに穴を開けて作ったシャワーが大人気だとか。お母さんたちは、子育ての情報交換や悩み相談など、子どもを連れて集まれるこの場を拠り所として、ふれあいの機会を毎回楽しみにしている。

少子高齢化が進む関屋近鉄住宅地域(以下、近住)は、いわゆるオールドニュータウンだ。そんな地域で、敢えて“子ども”を中心においたまちづくりに取り組んでいる地域福祉推進委員会を取材した。



プールを心待ちにしていた子どもたち

● きっかけはママ友から

「初めての土地なので、スーパーや病院の場所、地域での子育て、車がないとどこにも行けないという不安でいっぱいでした」そう語るのは、6年前に大阪から越してきて、3人の子育て中の小川さん。

「この地域、子どもがいないんじゃないの?と思うくらい、子どもやその親に出会うことがなくて、最初は本当に孤独でした」「ある日、同じくらいの子どもを連れたお母さんに思わず声をかけると、同じ子育ての不安を感じていたそうで、集会所を活用して何かできないかと考えました」

その頃、高齢者向けプログラムが主だった推進委員会で、新しい活動を模索していた会長の木原敏洋さんと出会い、子どもを連れて気軽に集える場づくりが始まった。



「活動はあくまで口コミで広げてきました。
人と人がつながるには、やっぱり面と向かっての会話です」と小川さん

● 子どもが真ん中にいることで

住民や活動者の高齢化が深刻な問題となっているオールドニュータウンで、子どもを軸にした活動には、どのような効果があるのか。

未就学児童を対象とした「せきや・にじくらぶ」や小学生を対象とした「サマースクール」などの活動を立ち上げ、さらに高齢者を対象としたサロン等でも地域の子どもと交流する機会を日常的に設けることで、あらゆる世代の住民が楽しめる活動へと広がってきた。

「高齢者は子どもが来るととても元気になるんです。子どもたちも昔の遊びを教わって交流を楽しんでいるし、お母さんたちも安心して子どもを連れてこられる場になってきました」と笑顔で語る木原会長は、地域における子どもの存在をとても大きく感じているという。



「せきや・にじくらぶ」は、お母さんたちの憩いの場にもなっている

【近住とは?】

香芝市西端に位置する関屋近鉄住宅地域。昭和40年頃に開発され、少子高齢化が進む。
 ○人口：839人 ○世帯数：336世帯 ○高齢化率：32.66%

●若い世代が参加しやすい地域に

「高齢者や私たちのような世代が同じ場でふれあうことで、地域住民みんながつながり、地域の問題が見えてくるようになりました」

小川さんは、子育て支援のプログラムにとどまらず、今や推進委員の一人として様々な地域の課題に取り組んでいる。

木原会長は、「小川さんのような世代が参加してくれるようになって、高齢者の悩みも違った角度から一緒に考えられるようになった。世代を超えてお互いに気にかけあう関係がてきた」という。

誰もが参加できるような気軽さと、新しい風を受け入れる柔軟さが、地域ぐるみの活動につながった。

近住には、来れば誰かとつながれる“地域の居場所”がある。



「近住の目指す“福祉のまちづくり”は
まだまだこれから」と意欲を燃やす
木原会長

※地域福祉推進委員会

香芝市社協が指定する小地域(おおむね自治会)を単位とする住民の自主組織として、地域福祉についての住民理解をすすめながら事業の企画や調整、サロン等の活動を行っている。

福祉専門機関からの発信

『身近な相談窓口から地域のつながりへ』

いつまでも安心して生活できる「まち」に住みたいと誰もが思うはず。そのためには、住民一人ひとりのつながりはもちろん、共に知恵を出し合い、サポートしてくれる福祉の専門機関は心強い存在である。

高齢者が安心して暮らし続けられる生活を支えるシステムを築くために、住民同士はもちろん、地域のサービス事業所同士のつながりを深めていく活動を実践する御所市の鴻池荘在宅介護支援センター(以下、センター)を取り材した。



鴻池荘在宅介護支援センター 管理者 大杉毅さん

●「支え合い」「助け合い」を

地域の高齢者の方々の制度で対応できないサービスや助け合いの担い手となっていただけの「生活・介護サポート」を養成する講座を平成21年度から実施し、公募で集まった53名の方がこれまでに修了されている。研修生は、「高齢化社会の現状」や「福祉マップ」、「認知症の理解」など地域で活動できるための内容を8日間に渡り、学んでいる。

『研修生の方々に「楽しく、元気」に学んでいただくために、企画する側も楽しい雰囲気づくりに努力した』と管理者の大杉毅さん。講座では、わかりやすいスライドを使用し、グループワークや演習で研修生同士のつながりを深める参加型形式を取り入れられている。地域での「支え合い」「助け合い」を学ばれた修了生は、独居高齢者の見守り活動や高齢者が集うサロン活動を自主的に実施されるなど、センターの思いがカタチになってきている。同じ思いを持つ研修生がたくさん地域で活動していただくために、この講座に興味を持って受けたいただきたいという。